

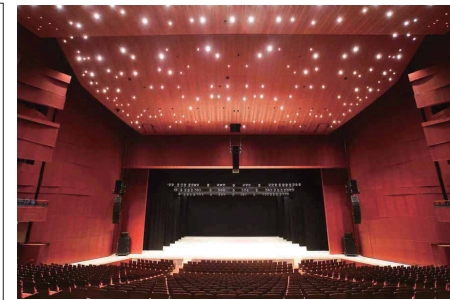


人生の**最期**はどうあるべきか、どうありたいか



■背景

日本だけではなく、世界の人々の共通の願いとして、重い病に侵された場合、その大半は自宅での療養を望んでいるはずだ。現在、日本人男性の4人に1人、日本人女性の7人に1人は癌が原因で亡くなっている。厚生労働省の人口動態統計（2018年）によると、癌患者の死亡場所は自宅が13.7%、一般病院や診療所などの「施設内」が84.4%を占めており、病の改善が見込まれず、余命を宣告された人々の多くは病院内で最期を迎えていることが分かった。終末期、人は、最期の時間をどのように過ごすべきか、それはどのような空間であるべきかを自問した。これは、最期の場所に対する人の思いとその空間との関係が望ましくないことによって生じていると考える。



高崎芸術劇場

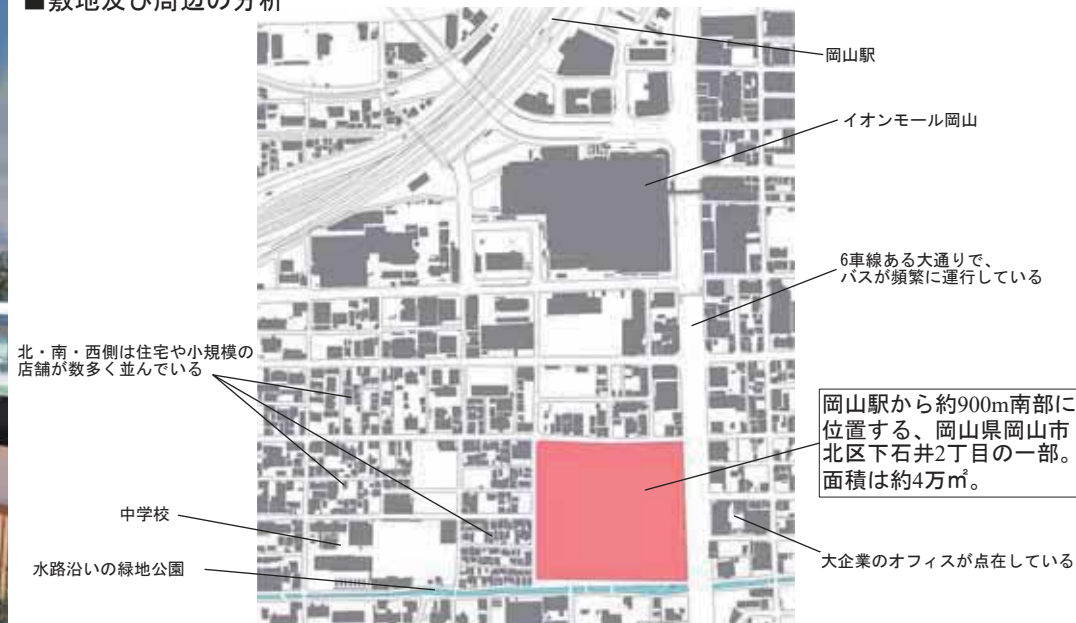
■計画目的

上記の問題を解決するために、限りなく自宅に近い環境で緩和ケアを行えるホスピスを設置する。そして、敷地選定として、病院の一角や自然の中に設置する方が望ましいという考えがあるが、当計画では都市に設置することで、「都市の中を歩きたかった。」という願いを実現する。計画敷地内には都市的な環境を再現すると同時に、緩和ケアの1つである「芸術療法」を日常的に組み込み、「次のコンサートを聴くまでは・・・」という思いを実現させるために、複数のコンサートホールを設置する。当計画は、「芸術療法」をメインの緩和ケアとし、患者だけでなく患者親族（介護者）・ホスピススタッフのメンタルケアも兼ね備え、芸術センターを併設した今までにないホスピスの計画を提案する。



TSURUMI こどもホスピス

■敷地及び周辺の分析



■鳥瞰図

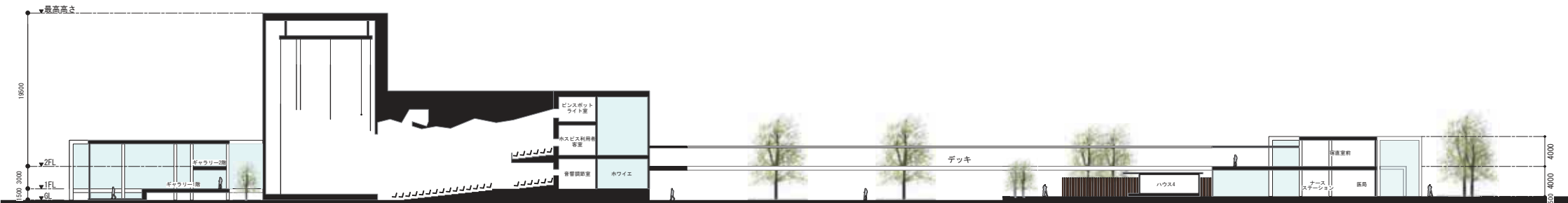


■配置図
S=1/900

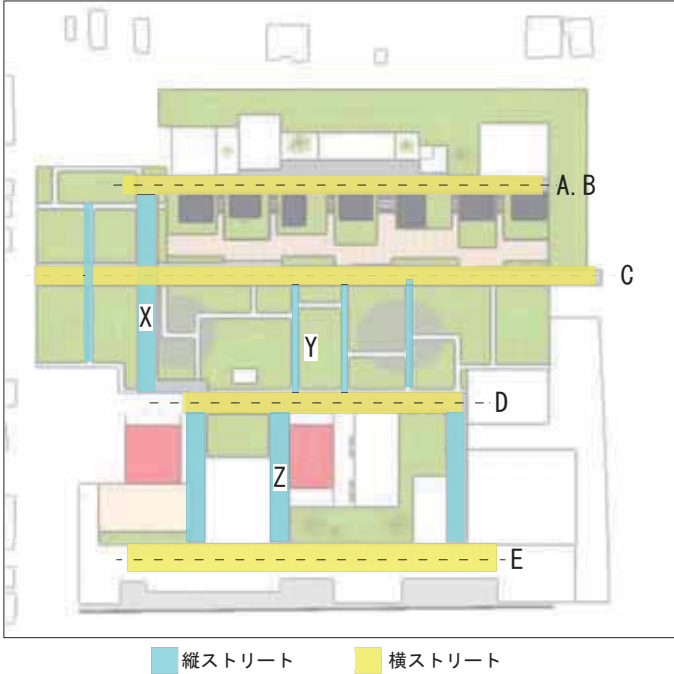


1. 大ホール 2. 大・小ホール楽屋棟 3. 小ホール 4. ライブホール楽屋棟 5. 総合管理棟 6. ライブホール 7. ギャラリー

■立面図・断面図 (1/250)



■ストリートダイアグラム



敷地内の各所に横向きのメインストリートと縦向きのサブストリートが通っている。それぞれの通路が交差しあうことで、横と縦の動線を繋げ、敷地全体の移動がスムーズに行える。

縦ストリート	
X	ホスピスから芸術センターへのアクセス（デッキ）
Y	ホスピスから芸術センターへのアクセス（広場）
Z	芸術センター各棟を通り抜ける通路
横ストリート	
A	ホスピス1階共有スペース
B	ホスピス2階デッキ
C	敷地を横断する遊歩道
D	中央ガラス建築
E	ギャラリー

■広場分布ダイアグラム



豊かな植栽が至る所にあり、木陰で談笑や読書・楽器演奏・ダンスの練習など用途は様々で、誰でも気軽に使うことが出来る。

敷地中央の広場には屋外ステージが設置されており、野外ライブなどのイベントが行われる。

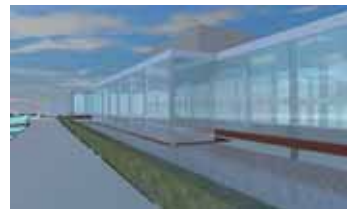


■動線ダイアグラム

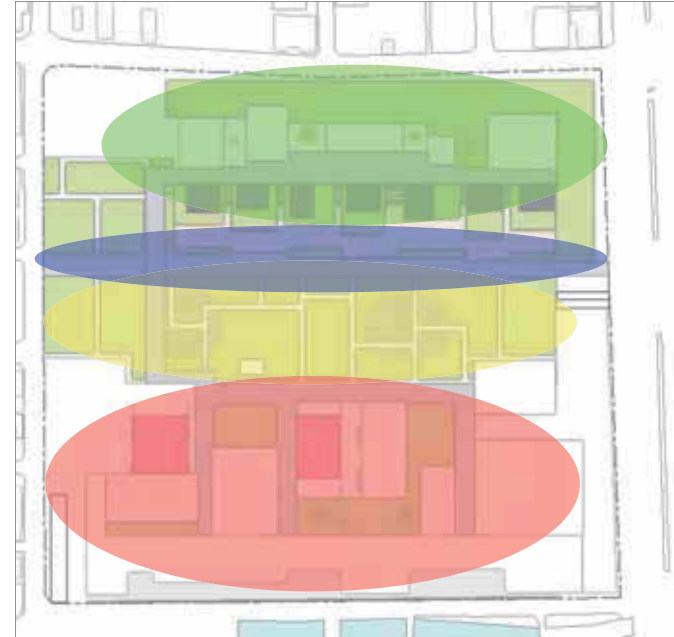


ホスピスから芸術センターへの動線は、ホスピスのデッキからの芸術センターの2階席へ繋げることで両施設の関係が生まれ、動線もシンプルになる。

芸術センターの各棟を囲むように存在するガラスの低層建築はセンター内に回遊性を持たせ、人を各棟へ誘導する通路の役割になる。

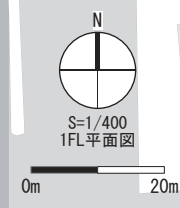


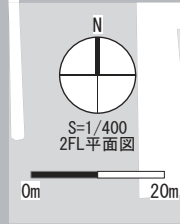
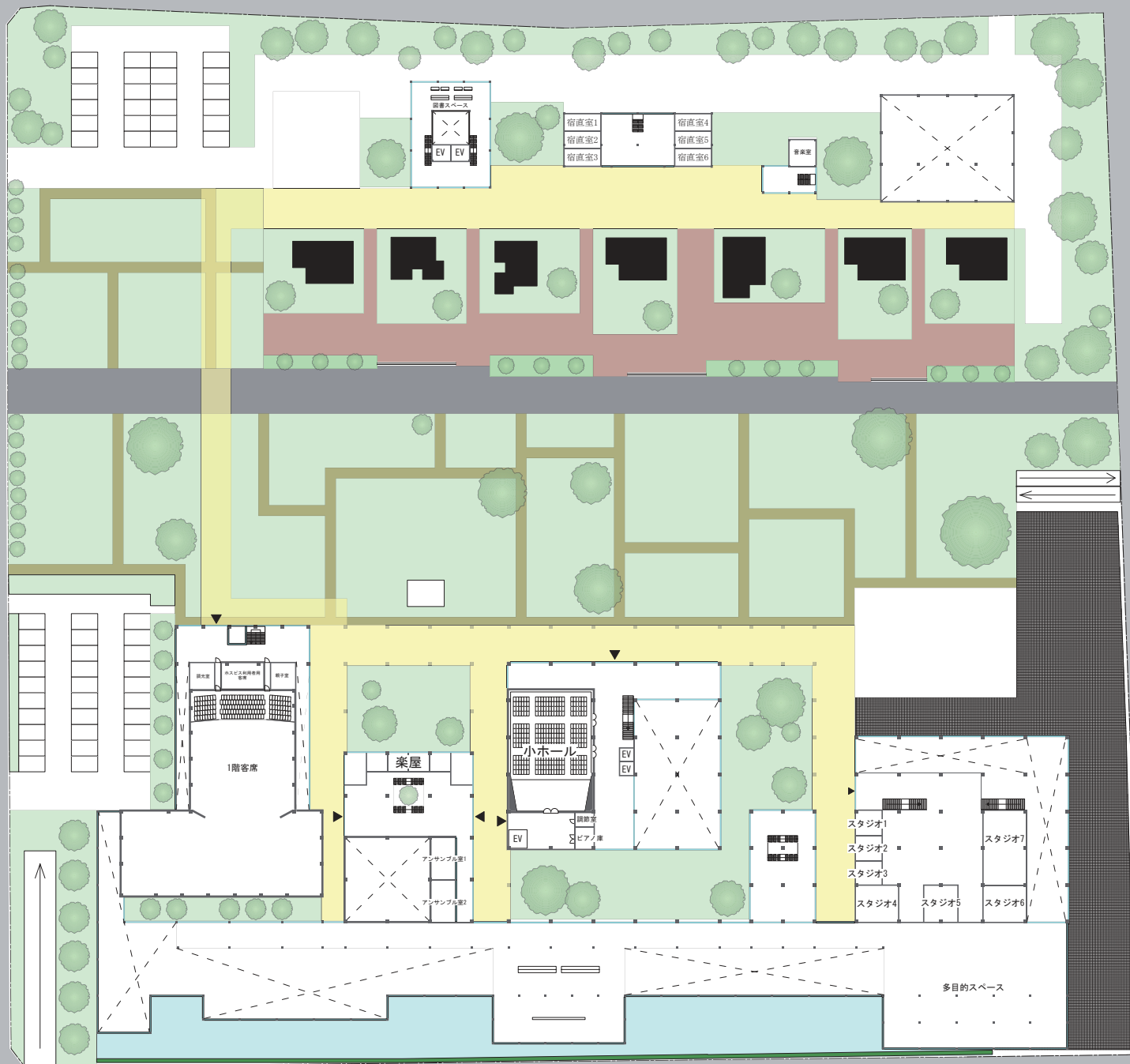
■エリア分けダイアグラム



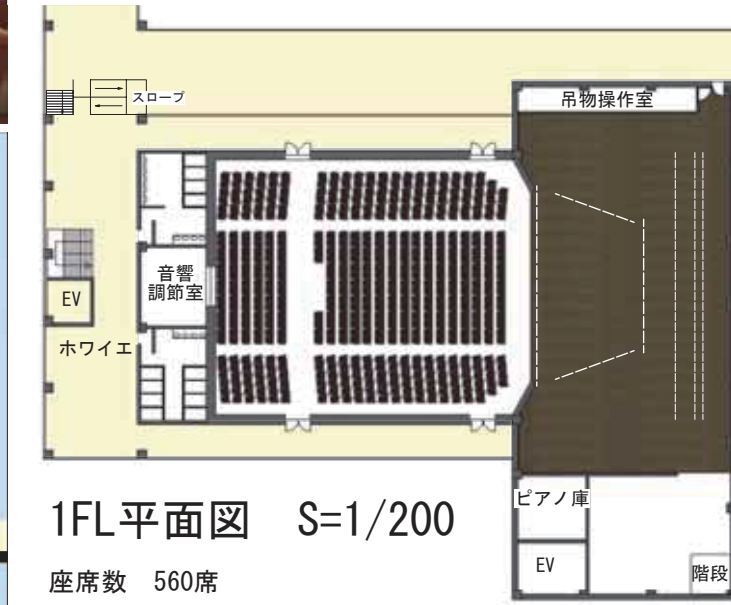
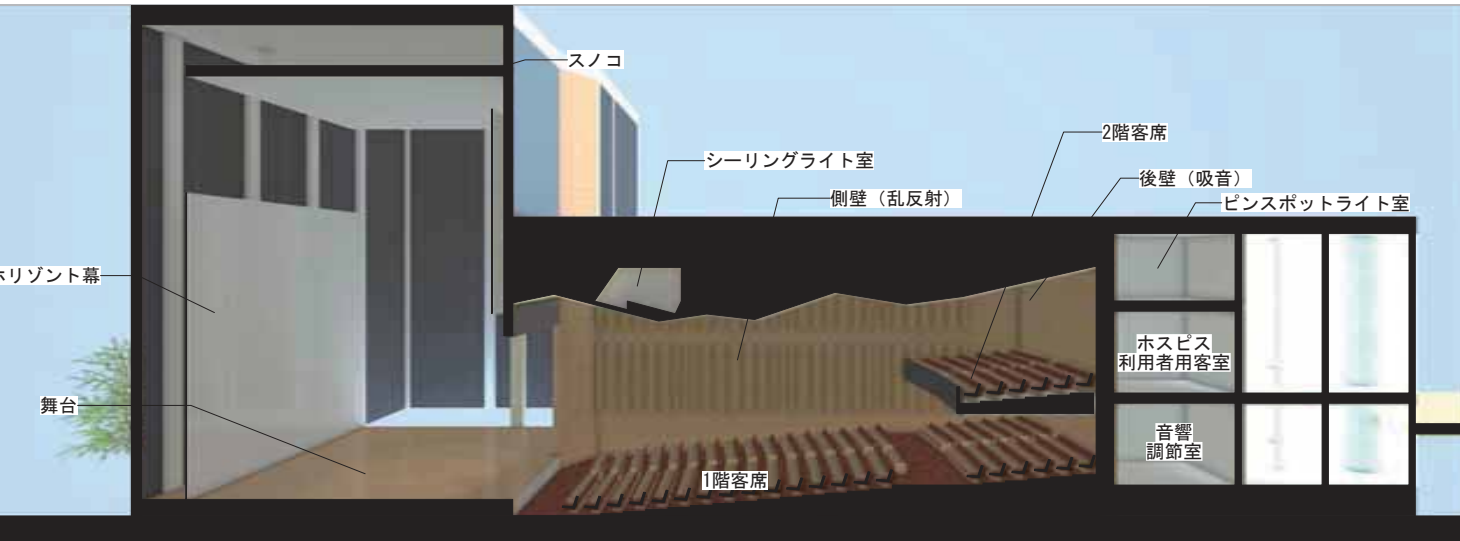
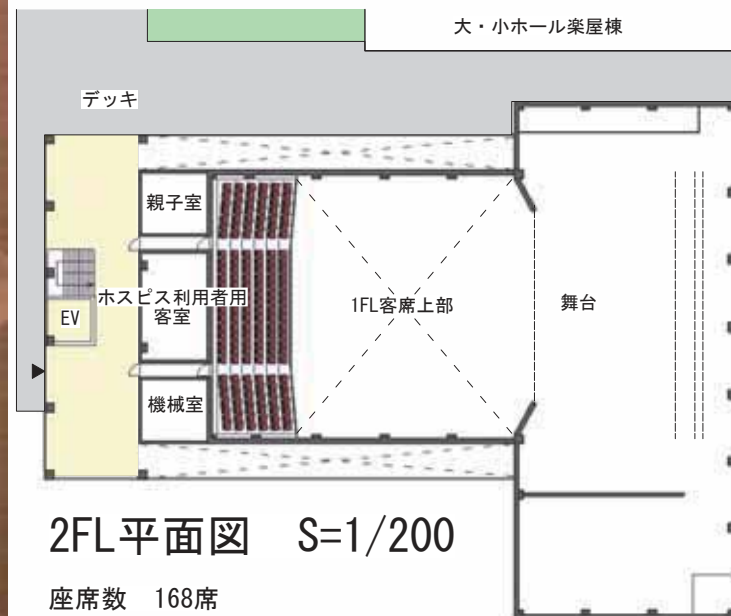
ホスピスと芸術センターは、究極のプライベートエリアと究極のパブリックエリアである。これらの2つのエリア間に幾つかの干渉空間を設けながら、視覚的な連続性を計画する。

- プライベート
- セミプライベート
- セミパブリック
- パブリック





■大ホール



■小ホール



主要用途: コンクール・講演会
座席数: 308席
舞台形式: シューボックス型
舞台: 奥行き 5.5mm
 間口 15.6m

小ホールは大ホールの半分以下の規模で、比較的マイナーなコンサートやピアンコンクールを行うための施設。著名人をお招きし、講演会をするためにも使用される。

■ライブホール



主要用途: ライブ・音楽レッスン
収容人数: 約400人
ステージ: 奥行き 約8m
 間口 14m

アーティストを呼んでライブをするための施設。楽器レッスンも想定しており、大人数で行う場合は1階のライブホールを、1対1の2階のスタジオを使用する。

■屋外空間 屋外ステージ・庭等



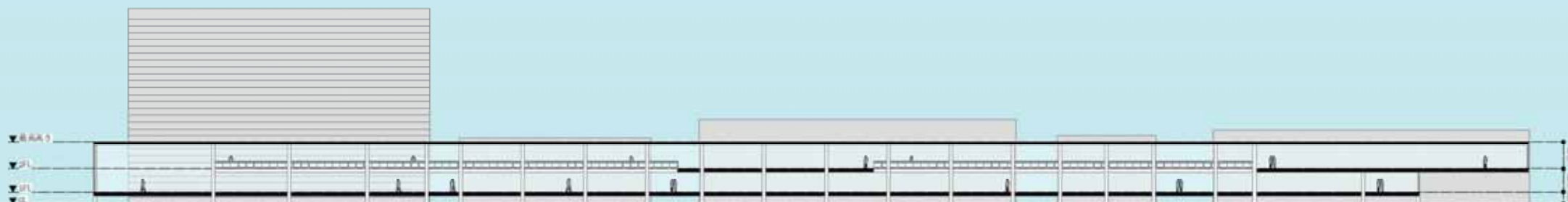
主要用途: コン서트・イベント・祭り
 読書・楽器やダンスの練習
ステージ: 奥行き 7m
 間口 10m

マルシェや祭りなどのメインステージが主な用途となる。木陰で読書をしたり、談笑を楽しむ憩いの場としても利用してほしい。

■ギャラリー



回遊性を高めるための通路であり、展示を行う施設でもある。ギャラリーには、岡山の伝統工芸品等のはじめ、陶芸・絵画・写真・書道など様々なアーティストたちの作品を展示する。学生による作品展を行うこともでき、老若男女の交流の場として提供する。2階の多目的スペースは展示会開催中の売店やサイン会のスペースとしても十分であり、書道教室・絵画教室として使用してもよいだろう。コンサートホールのようなガラスが少なく、高さのある施設は敷地外から見たとき圧迫感を感じてしまう。なので、間に低層のガラス建築を置くことで緩和されるように配置している。



■ホスピス



■ホスピス利用者専用住宅

入居者が、施設へ入院しているという意識を緩和するため、1家族につき1軒の専用住宅を利用できる。キッチン・浴室など通常の住生活を送るに必要な設備が整っており、室内は車いすでもスムーズに移動できるスペース確保に努めた。
 住宅内で患者の状態が変化した場合には、勝手口からホスピスにアクセスが可能。ホスピススタッフが近距離にいるため、安心して生活ができるだろう。



音楽室 (2FL)



創造スペース (1FL)



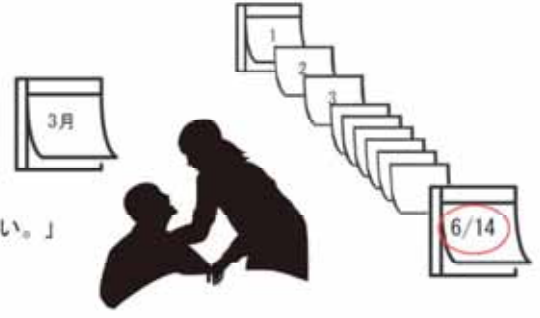
屋内運動場 (1FL)



ナースステーション前 (1FL)

生きるための**活力**を
この計画で与えることができないか

「3ヵ月後のコンサートは
何としても見たい。
それまで生きていたい。」



都市内に設置されたホスピスでは、しばしば余命宣告者であることを忘れさせる。音楽室・創造スペース・屋内運動場など様々な緩和ケアが行える部屋を自由に使い、普段と変わらない日常生活の中でいつの間にか、自発的に緩和ケアを実施をしているだろう。

ふと外を見ればそこは病院の中庭ではなく、人々が絶えず行き交う遊歩道とオープンスペース。気分がよければ自分自身もそのまま都市へ繰り出せばよい。